

交歓会が蘇らせた 青春の思い出

森戸睦子（高15回）

飯田・伊那北高校の交歓会は4回あった

飯田高校は創立以来、現在（2022年）まで140年、伊那北高校のそれは102年。この間にわずか4年間、しかも4回だけ両校の間で交歓会が行われました。

第1回は伊那北で1960年（昭和35年）、第2回は飯田で1961年（昭和36年）、第3回は伊那北で1962年（昭和37年）、最後の第4回は飯田で1963年（昭和38年）に実施されました。隔年、相互訪問という形でした。

伊那北高校『百年史』から記録が見つかる

この交歓会がクローズアップされたのは、「伊那北高校百年史『たぐへて行かむ』」（2021年9月発行、全742頁）でした。「井月忌^{せいげつぎ}」を通じて親交を深めた在



●もりと・むつこ
旧姓・林。高森町下市田に生まれる。下條小、会地小、美篤小、三穂中、飯田高を経て、お茶の水女子大卒業。自動車部品工場印刷会社、日中貿易促進団体、映画配給会社等で勤務。好きなことは映画鑑賞、読書。

京飯田高校同窓会誌「稻穂」編集委員のOさん（高21回）が、伊那北高校OBのYさん（高15回）から、この『百年史』を紹介されました。この中に、12頁に亘って飯田高校との4回の交歓会の記述がありました。約2千人の両校生徒が参加する大きなイベントを催すことになった動機について、高13回の溝上淳一氏（昭和34年度後期生徒会長）は、「諏訪清陵と松本深志が交歓会をやっている。俺たちも負けてたまるか」という気持ちだったということです。

小学時代を伊那で過ごし、伊那北に馴染み

Oさんから交歓会参加の体験について私に執筆依頼があった時、60年前の事など「忘却の彼方」であり、とても難しいと答えました。しかし、私を紹介したのが、伊那北のYさんであることを知り、「伊那北高校での交歓

会で出会ったのかな」などと当時の様子に思いを馳せるうちに、引き受けてもよいという気になってきました。

というのも、私は、小学校卒業までの4年間を伊那市的美篤みすづ小学校に通っていたからです。西駒、仙丈、南アルプスを仰ぎ見、野山を駆け巡り、伊那の公園の見世物小屋に幕の下から侵入したり、遠方の友人の家まで少女雑誌を借りに出かけたり、冬場には運動場が早変わりしたスケート場で、下駄スケートに興じたりしていました。虚弱体質のため、水泳が禁止されていたにも拘らず、三峰川ふがわで水浴びなどもしていました。いま思えば、まさに山猿の如き自然児の毎日でした。

近隣の悪友たちだけでなく、当時の恩師、同級生たちも、一緒になって遊びに一生懸命でした。こうした経験があったせいも、美篤を去って、飯田に移ってもなお、伊那の人たちとの交流は続きました。

先に挙げた伊那北高校のYさんは、実は私の小学校の同級生でした。私を紹介したのは、さもありなん、されど有り難迷惑！（当初の私の正直な気持ちでした）。

さらに当時は、兄と姉が伊那北高校生でした。野球部が甲子園へ行ったこともあり、とても身近な存在でした。特に兄は伊那北高への愛が強く、折に触れ、伊那北高校の校歌や応援歌を、やや調子が外れたままに、歌って

たものです。その影響で、私も歌詞をすっかり覚えてしまい、今でも、校歌「朝日の光、空に満ち：」や応援歌「天童河畔に咲く桜：」は歌うことができるほどです。

交歓会への参加について問われた時、とっさに伊那北高校へ行ったことがあるという気がしたので、では、一体どんな様子で参加したのか、必死に思い出すことにしたのです。

社研班、文学班で活動

中学生の1959年頃から、我が家には、兄たちを通して、「60年安保」という「都の塵」がダイレクトに「通い来ぬ」という状況になりました。東京での反安保の闘いが、身近に迫ってきたのです。反安保という社会の大きな潮流が、私個人の内面に押し寄せ、恐怖を伴う未知の体験を生み出しました。

そんな問題を抱えながら、60年4月、飯田高校生になり、早速、私は文学班と社研班に参加しました。どちらにも、共通していたのは、読書が好き、書くことが好き、そして時代の息吹を共有した友だち同士のおしゃべりが好きということでした。違いがあるとすれば、社研班の方が、現実の、例えば「60年安保」の状況について、学び、考えることが中心的な課題になっていたことでしょう。

社研班での読書も楽しい思い出でした。中国の小説『青春の歌』2巻は、皆で回し読みしました。主人公の「林道静」は、私の旧姓と同じ、さらに「道」と「静」は、それぞれ兄と妹の名前と1文字が同じという具合でした。先輩が中国語の発音「リン・タオチン」を教えてくれたので、妹と、リン・タオチンと繰り返し、言い合って喜んでいたのでした。

誘われて、歌声運動にも参加しました。歌や踊りは苦手でしたが、知らない若者たちと一緒に歌と踊りに興じていました。

また、文学班では、「困難な条件下にある人間を、客観的に記述することが作品の使命である」という小説家エミール・ゾラの自然主義文学に共感していました。友人は、私の「ゾラの自然主義」という一文を文芸誌で見たと教えてくれました。ゾラの重要なテーマの一つである「雑草」について、様々な想像を広げながら、作文、作詩を試みていた記憶があります。生半可な知識と憧れが先走っていた気もしますが、私の中では、楽しい思い出として残っています。

交歓会には文学班として参加した

記憶を辿った結果、私は交歓会に文学班の一員として

参加したことがわかりました。それは、第3回交歓会（1962年、昭和37年7月13日）、伊那北高校の「ペン祭」の時でした。私たちは、高校3年生になっていました。飯田高校生約1200人が、バス12台、電車4両貸し切りで伊那に向くという大規模なイベントになりました。迎える伊那北高校生は、六百余名でした。

薫ヶ丘の道の両側に並んで、拍手で迎えてくれた伊那

北高生の前を、気恥ずかしい思いで、

足早に通り過ぎたことを思い出しました。

開会式の中で、交歓会の歌を作曲した人が紹介されました。その作曲者が、何と私の同級生の小川広見さんだったの



バスから降りた飯田高校生を出迎える伊那北高校生 = 第1回交歓会



第1回交歓会(昭和35年)の開会式 = 伊那北高校校庭

で、感動しました。

その後、私たち文学班は教室に迎えられ、双方が挨拶を交しました。それから、当日(全体で4〜5時間)のスケジュールの説明があり、高遠にある大奥・絵島の墓と美和ダムを訪れることを告げられました。説明を受けました。友人は、「伊那北まで来て、墓参りをするの?」と怪訝に思ったそうです。私は美篤にいたことがあるので、高遠が

絵島の流刑の地であり、そこで余生を過ごしたことも知っていました。

絵島の墓のさらに奥に、三峰川を堰き止めた美和ダムがあります。当時はかなりの奥地でした。道中のバス移動、そぞろ歩き、昼食、見学の間、残念ながら、伊那北高生と接触や対話をした記憶が乏しいの

です。それは、時間が非常にタイトだったこと、さらには飯田高生の数が圧倒的に多かったせいかもしれません。ただし、伊那北高生が、とても大人びていて、畏敬の念を抱いた記憶は、鮮明に覚えています。

なお、社研班の交歓会参加はありませんでしたが、社研班の活動は多くの交友関係を作り出しました。高校生の後半には、班活動を離れても、飯田風越高校の文化祭へ伊那の友人たちを誘って参加したり、飯田高校や伊那北高校、さらに伊那弥生ヶ丘高校の友人を招いて、交流を続けていました。

風越や弥生の友人たち、また、飯田や伊那北の友人たちとは、私が飯田を離れ、東京に移ってから、それぞれ交友関係を大事にしてみました。

懐かしい顔ぶれ、愛おしい青春

記録と記憶を元に、交歓会を復元するつもりで書き始めました。しかし、結果的には、当時の友人たちの懐かしい顔や振る舞いが次々と浮かんできて、さらには自身自身の楽しかった日々が蘇ってきて、いわば青春の思い出の記になってしまったようです。ご覧くだされば幸いです。

※写真は「伊那北高校昭和35年度卒業アルバム」より